

室井 滋

Muroi Shigeru

Text / Taisuke Shimamuki Photo / Ko Hosokawa Hair, Makeup / Masao Suzuki(MARVEE)

今が人生で一番幸せな時間。 肩の力を抜いて、もっと豊かな俳優人生へ歩みたい

映画、テレビ、CM。どんな場所でも独自の存在感を放つ女優・室井滋。80年代には「自主映画の女王」として名を馳せた彼女は、現在も日本を代表する稀代のコメディエンスとして第一線で活躍し続けている。普段、私たちが室井さんを目にするのは映像メディアを通じてが大半だが、その一方でオリジナルの朗読ショーを企画し、全国のホールや公民館を飛び回っている。

そのパワーの原動力はいつたいたいなんだろう。富山県で過ごした青春期の思い出、演劇に目覚めた原点、現在の活動まで、幅広い話を伺った。

お芝居の世界に 飛び込むための秘訣とは？

——(巻頭用の)写真撮影おつかれさまでした。

面白かったです。最初「バラバラ漫画を作りましょう」と言われて驚いたんです。一体どうなるんだらうって。でも、以前金沢21世紀美術館に行ったときにカワイイ猫が動くバラバラ漫画の豆本を買ったのを思い出して「じゃあ、こんな風にしよう」と閃きました。——衣装も、室井さんご自身が持ち込まれたものもありましたね。室井さんのアイデアも反映したオシャレな仕上がりになったと思います。

すごい大荷物で今日は来ちゃいましたね。でも私、実際はすごいドンクサイ人間で、着飾ることがたぶん一番苦手。若い頃はもう少しオシャレに気をつけていたんだけど、歳をとって、

もう全然そういうのがなくなっちゃった。女優の皆さんはオシャレな方ばかりなので、逆行するのめいかがなものかと思ってるんですけどね。でも、自分に似合うもの、似合わないものはハッキリわかります。

——今日の撮影のように、室井さんにはいろんなオファーが寄せられますよね。多様な役柄を、どのように演じ分けられていますか？

例えば衣装のことと言うと、私って衣装に着られちゃうタイプなんです。だから衣装合わせはとでも大切で、最初の飛び込み方を間違えちゃうと方向修正が難しい。最初の設定を明確にして、そこさえきちんと納得できれば、イメージを膨らませてその世界に入っていく。普段はオシャレではないんだけど、演じる上での服装や髪型は大切だと思ってしています。

思春期の鬱屈を、 演技が救ってくれた

——室井さんが演技を仕事にしようと思ったのはいつ頃からでしょうか？

仕事にしようと思ったのも、意識的に演劇を始めたのめいかなり遅いんですよ。個人的な話になってしまいうんですけど、小学校の時に両親が離婚しまして、高校を卒業するまで祖母と父の3人暮らしだったんですね。仕事の都合で父が不在にしていることが多くて、ほとんど高齢の祖母と2人きりの生活でした。父が大酒飲みだったり、おばあちゃんも物忘れが激しくて、思春期

の自分にとって難しい環境でした。それで夜に町を出歩くような子になったんです。でも、出身の富山県って保守的な土地柄だし、本格的にグレルほどの度胸もなかったから、お芝居や映画を見て夜を過ごす生活がかなり長く続きました。

——劇場が、多感な時期の避難場所になっただけですね。

高校に入ってもその生活は続いていて、先生や友だちも私が演劇をよく見ているのを知っていたんです。それでお芝居の演出をしてみないか？」って言うってくれたんです。演劇部に入部しているわけでもなかったから最初は驚いたんですけど、実際に自作自演でやってみるとすごく面白かった。演劇部の先生も「室井さんは女優の才能がある！」なんて言うてくださった。

——それが転機になったんですね。

そうなんです。私、単純なので「じゃあ女優になっちゃおうかな？」みたいな。それで上京して早稲田大学に進学して、入学式の日からさっそく演劇サークルを探して。そのうちにシネマ研究会にも入って。

——80年代に「自主映画の女王」と言え、室井さんのことでした。

当時はびあフィルムフェスティバルの全盛期で、みんな8mmカメラで自主映画を作っていましたね。知り合いばかりだったから私が出演する機会も本当に多くて、審査員の方から「どの作品にも出演してるねー」なんて言われました。東京に出てからは、そのくら



からお芝居三昧の日々だったんです。アルバイトも単発のものを1000個くらいやって、体力の限界まで働いて、稽古して、っていう毎日でしたけど、思春期の生活環境と比べれば本当にバラ

『やつぱり猫が好き』創作秘話 共同作業が好きな理由

ダイスでした。大学在学中に父が亡くなるんですが、それまで仕送りもしてくれていましたから、好きなことに打ち込むことができました。

——自主映画や小劇場の役者というところには生活が大変、というイメージ

——好きなことしかしてないんだから、とんでもないくらいに思っています。だからプロの役者という意識を持つようになったのも、だいたい経ってからです。今の事務所(ホットロード)に入っ

——やはり室井さんというと『猫が好き』の恩田三姉妹のイメージが鮮烈で

あ作品に出演することになったのはちよつとした偶然。さとちゃん(小林聡美)ともたいさん(もたいまさこ)の事務所の社長さんが企画した番組で、2人とも知り合いだったから1回目の放送をテレビで見たいんです。その時は普通のドラマ形式でして……。でも、

——なるほど。

諸事情でそれ1話で終わっちゃったんです。さらに私の所に連絡がきて、「しげちゃん、やってみない？」て。——そうなんですか!

——そうなんですか!

キャストが変わったので、内容も見直しになりました。でも何せ時間がなくて、力技、アドリブの連続で2話目を完成させたんですよ。ただ、私としては話し合っって作って行くやり方は、自主映画的であり、テレビの現場でそれをやらせてもらえるのはスコブル

——なるほど。

画の現場に近い、大勢の人たちの共同作業のなかから『猫が好き』は生まれました。そのワイワイ感が一番の魅力だと思っています。

——今日の撮影でも、室井さんから積極的にアイデアを出される場面がありました。単に演じるだけではなく、作品作りに関わりたいという気持ちが強くあるんですね。

全員で何かを作る環境が好きですね。2014年に『マザーズ』という名古屋の中京TVが製作したドラマに出演したんですが、全国のドラマと違って予算規模も少ないし、手作り感に溢れた現場だったんですよ。お弁当も本当に素朴で、正直「キツいな」と思うこともありましたけど、その分、チームの団結は強かったです。監督の谷口

——室井さんはエッセイストとしても知られていますが、最近では絵本作家としても活動されています。その作品をもとに「しげちゃん一座絵本ライブ」も全国で上演を重ねています。そこにも、物作りに関わっていたという意志を感じます。

東京育ちで美人に生まれていたら、もっと女優らしい生き方をしていたのかもしれないですけど、すべて自己流でここまで生きてきましたから、やりたいことは全部とりあえずやりたいんだと思います。この年齢になるとさすがに落ちてきてきたけれど、若い頃はエネルギーを持って余っちゃってましたから。突然、小型船舶の一級免許を取ったり、毎日狂ったようにお酒を呑んでいた時期もあった。いちばん忙しい時期に連載の原稿も何本も抱えて「室井さんは、いったい何人いるんですか?」って言われるくらいでした。

——パワフルですね。

もちろんお芝居も一生懸命やっています。でもそれだけじゃ足りないような気持ちどこかにあって、それが海や原稿に私を向かわせたのだと思います。でも、富山県人なので基本はマジメなんです。遅刻しない。病気になるない。とにかく人に迷惑をか

けることが申し訳なくて、自然と自己管理能力が身に付いていた。でも正直言うと、そういうマジメな自分があまり好きでない。朗読ショーに打ち込むのも、自分なりにバランスをとったり、逆に崩したりしたい願望の現れなのかもしれません。

——朗読ショーを続けてみて、いかがですか?

メンバーの中で自分が座長なので、プランニングできるのが楽しいですね。突飛な提案で驚かせたり(笑)。1年で30ステージくらいあるんですけど、スタイリストさんと一緒にコスチュームを作ったり、オリジナルの音楽も作ったり、やつぱりとても楽しいです。会場の規模も300人くらいで満員になる小さな町の公民館から、1700人くらい入る大きなホールまで幅広く、その変化も楽しい。客層も、子どもからお年寄りまで来てくれて、むしろ大人の方が多いくらい。全体の1割から2割が子どもで、大人ばかり、家族そろっての公演もよくあります。終演後もサイン会に長蛇の列を作ってくださいって、直接感想を伝えてくださるのも嬉しい。

——いい距離感のイベントですね。

若い頃は、自分ができないことがたくさんあるのに悩みがちだったんですよ。でも、絵本ライブみたいに好きなことを楽しみつづ、同時に「できないこと」を抵抗なく受け入れられるようになって、すごく楽な気持ちになりました。そうするとお芝居にも気が負いなくなつて、すつと映画やドラマの世界に入っていくことができる。もしかしら、人生の中で今が一番充実した時間かも思っています。

PROFILE 女優。富山県生まれ。81年早稲田大学在学中に映画『風の歌を聴け』でデビュー。映画『居酒屋ゆうれい』『のだ自慢』などで映画賞を多数受賞。12年に日本喜劇人協会喜劇人大賞特別賞、15年に松尾芸能賞優秀賞受賞。著書も多く、絵本作品に『しげちゃん』『金の星社』『ウリオ』『きらきら』は、共に世界文化社『チンドンボン』(絵本館)。各地で絵本ライブを開催中。ブルースの最新W.C.カラスとミニアルバム『信じるものなどありやしない』を発売。